

エグゼクティブサマリー

本資料は、自治会長として活動の背景と方向性を共有するものです。

【お詫び】

2年目の運営において、総会を実施できておらず、ハロウィンイベント以外の活動を自粛してきました。初年度はDXの一環でリモート会議による自治会役員会議の運営を経て、場所によらない自治会運営をしてきました。今年度の開始まもなく発覚した本家の事情により、年の半分は家族でマウイ島に渡り、先祖の墓守をしておりました。明確な説明がないまま皆様にご迷惑をおかけしていることをお詫び申し上げます。

自粛のもう一つの理由は、「なぜ自治会が存在するのか」という根本的な疑問が生まれ、その答えを見つけるまで、形だけの活動を続けることに意味を感じられなかったからです。本資料は、その問い合わせに対する私なりの答えです。

【自治会への提言】

自治会の源流は、江戸時代の五人組や応仁の乱後の隣保団結にまで遡ります。住民が自発的に助け合う組織でした。しかし現代は、加入率低下・形骸化が進み、行政マニュアルにも「なぜ隣人と助け合うのか」という原則は見当たりません。私はこの街の自治会を、原点に戻したいと考えています。

【ビジョン】

270戸の住民が、お互いの名前を覚え、お互いの存在を認め、「いてくれてありがとう」を伝え合える場所に。この街から始めて、日本全体が祝福し合う社会へ。上からではなく、草の根で。資産価値よりも貴重な、心理的に安全なコミュニティを目指します。

【私的な物語】

原点は愛犬 Pearl です。2007年から一緒に暮らし、2025年に見送りました。Pearl の喉仏を四つ葉のクローバーと共に貝殻に納め、「動くお墓」を作りました。大切な存在を忘れない。これが「存在証明の民主化」につながりました。お配りした Pearl Soap には、Pearlへの「いてくれてありがとう」が込められています。

【お願ひ】

石鹼だけでは伝えきれない背景を、知りたい人に届けられるよう、この手紙を添えました。以降は長くなります。すべてを読む必要はありません。必要な部分だけ読んでいただければ十分です。事実で構成し、一部の名前はマスキングしています。共感、協力、相談、何でも歓迎です。ただ「読みました」という一言でも。

タイムレストラン新浦安自治会 会長 佐藤卓也

家族への報告と協力のお願い

2026年1月

妻へ、そして私の両親へ

これまで、自分がやろうとしていることについて、断片的に話してきました。ただ、全体像をきちんと整理して伝える機会を作れていませんでした。なぜそれをやるのか、どこへ向かおうとしているのか、そして今どういう状況にあるのか。

この手紙で、改めて整理して共有します。

1. SoulCarrier とは何か

【ミッション】

「存在証明の民主化」。これが私のミッションです。

世の中には、忘れられていく人がいます。墓石（ぼせき）に「無名氏」と刻まれて眠る人。移民として海を渡り、誰にも見届けられずに亡くなった人。災害で家族ごと失われ、名前を呼ぶ人がいなくなった人。

私は、そういう人たちの名前と物語を取り戻す活動をしています。クオーツガラスに情報を刻み、千年単位で保存する技術を使って。誰もが等しく記憶される権利を持つ。その思想を、技術で形にしています。

【原点と技術開発】

原点は Pearl です。私が 2007 年から一緒に暮らし、妻と結婚してからは家族で最期を見届けた愛犬です。Pearl の喉仏（のどぼとけ）を四つ葉のクローバーと共に貝殻に封入（ふうにゅう）し、「移動できるお墓」を作りました。あの経験が、私たちに存在証明の意味を教えてくれました。

そこから技術開発が始まりました。あらゆる造形・刻印技術を試しました。主要な全素材、全刻印技術。3000 回を超える刻印実証の繰り返しを経て、クオーツガラスに音声バイナリーデータを QR として刻印し、読み取りに成功しました。地域の弁理士（べんりし）から、国際特許出願可能な技術であるとの回答をいただいています。特にバイナリーデータ圧縮技術は従来の最大 10 倍の圧縮が可能となる技術を含み、現代の通信コストの大幅な削減効果が期待できるなど、弁理士から期待いただいていることは父も認識の通りです。

この研究の中で、石鹼にたどり着きました。子どもにも安全で、再現性が高く、誰でも作れる造形物。技術研究を経た結論として、活動に取り入れています。

【個人的な動機】

そしてもう一つ、個人的な動機があります。

私たち夫婦は、両家のお墓には入らない次男次女です。両家からは、いずれ忘れ去られる運命にあります。

兄は祖母の加護を受けながら、潤沢な教育資金のもとで私立の教育を受けました。私は経済的な理由で、学費が合計 100 万円と最安な国立高専を推薦され、従ってきました。こ

の家庭には居場所がないと幼いながらに感じ、いかに早く一人暮らしをするかだけを考えて過ごしていました。こういったことが幾度となく積み重なり、なぜ生まれてきたのか、なぜ産んだのか、産まれるべきだったのか、という葛藤（かとう）を抱えながら今に至っています。

外資系コンサルティングファームに雇用され、世界、日本を代表する社会的立場を得て、家庭を持ち、孫ができ、戸建てを構えたことを受けて、一定の成功、幸福を得たと判断したのか、孫に対して祖母祖父の面をされるのが、存在を否定され続けてきた人間として吐き気がするほどの絶望を感じ続けています。祖父母どちらも、よく何食わぬ顔で家に上がれるなと思い続けています。一方的に資金援助したから許されるといった性質の心の傷ではないことを明確にしておきます。

父は東京都職員という地方公務員でした。実家の岩手から関東に来て大変だったと思います。よくやった方だと思います。ただ、これは個人的見解ですが、総じて子どもを2人目授かるべきではなかったと私は思っています。

私の母子手帳には、出生時刻が記載されていません。出生時刻がわからないことで正確な占いもできない、私のアイデンティティが確立できない要因の一つになってきました。私の父は今なお、私の名前を呼ぶとき、最初に兄の名前を呼んでから「間違えた」と言って訂正します。幼少期からずっとそうで、最後まで直りませんでした。

私はこの経験が幼少期からトラウマになり、人の顔と名前を覚えることができなくなりました。ずいぶん支障のある経験をしてきました。渋谷のベンチャー企業で取締役最高技術責任者として経営をしていた当時、組織拡大の局面で顔が覚えられないことをもって経営者の資質が問われたこともあります。

人のことを名前で呼ぶことにも、抵抗と葛藤を抱え続けるようになりました。妻に対しても「妻」と言えないことを自覚しています。これはトラウマによる影響だと自負しています。妻は「私はママである前に1人の人間である」と私に訴えてきていて、申し訳ないと想続けています。

そして今、同じことが娘の娘にも起きています。私の父は、娘の名前を呼ぶとき、兄の娘の名前を先に呼んでから訂正します。一度や二度ではありません。直接会うたびにほぼ毎回です。見ていて心が痛んでなりません。世代を超えて、同じパターンが繰り返されています。

存在証明の民主化。このテーマは、私にとって他人事ではありません。兄の妻の一回忌（いっかいき）がマウイ渡航前にありました。培った技術で玄武岩（げんぶがん）に家紋を刻印して渡しました。私の名前を間違え続ける家族構造の中で、それでも技術を贈り物として届けることを選びました。

【Martin Case】

今、最初の案件「Martin Case」が進行中です。マウイ在住の日系アメリカ人 Martin の母・岩下照子（いわしたてるこ）さんの遺灰（いはい）を、群馬県の故郷へ届ける調査をしています。防寒具を現地で調達しながら4日に渡る車中泊を通じて、親族住所の周辺寺院8ヶ所、公営墓地3ヶ所、合計5000基を越える墓石（ぼせき）を1人でこの足で歩い

てくまなく該当する苗字（みょうじ）と家紋（かもん）を探し、複数の行政窓口と連絡を取り合ったことで、親族との連絡経路を見出すことができました。Martin は「Thank you Takuya. You are a gentleman and a scholar.」と言ってくださいました。Martin からのご好意で、クリスマス間近にコンドミニアムの宿泊をご提供いただきました。これはラハイナの大規模火災で唯一焼け残った教会の経費として計上され、署名もしてきました。Martin はマウイ島で遺骨（いこつ）、書類、委任状を直接渡したいと希望しており、渡航費の捻出（ねんしゅつ）に課題があることから手配出来次第受け取りに行くと伝えています。納骨（のうこつ）まで今年中に完結することを目指します。

【広がるネットワーク】

マウイ島では東の端から西の端まで、寺院や農場に向けた太陽光発電パネルやバッテリー、衛星通信設備を含むオフグリッド構築強化支援を、Workaway を通じてご縁をいただいたホストの方へ提供しました。Workaway はスキルと滞在場所を交換するプラットフォームで、現在 50,000 人のゲストが活動しており、日本では全国 150 ヶ所を越えるホストが登録しています。西の端にあたるハナファームのホスト、メラニーさんからは「いつでも使って良い」とパビリオン施設を無償で割り当ててくださいり、滞在場所としていつでも使える状態にあります。

ギフトエコノミーの実践として、マウイ島のハロウィンイベントで手作り石鹼を 20 個以上配り喜ばれました。その他各地で配り、累計 100 個を超える配布をしてきました。娘と一緒に作り配り、水族館のレストランで娘が手渡した石鹼で 5 ドルをいただき、娘は自らその 5 ドルで母へのお土産を買ってプレゼントしました。ビジネスの本質を娘と一緒に体験するという教育にもつながりました。大手リゾート施設からは無料でプールを含む施設内設備の利用を許諾いただいたり、シャワーが使えるホスピタリティルームをいつでも使って良いとご提供いただいたりと、ボランティア活動の地域貢献を認めてくださる結果となりました。

帰国後、私たちの婚姻届の証人である上田さんから SoulCarrier 共鳴の会との最初の相互協力合意書（MOU）に署名をいただきました。上田さんは三重県の公式 SDGs パートナーとして登録されている NPO 法人伊賀の友の代表をされており、障害者とともにその地で健康寿命（けんこうじゅみょう）をまっとうするという使命のもとで、バナナ園を運営されたりと、地元のケーブルテレビでも紹介される取り組みを展開されています。上田さんは 2025 年 8 月 28 日、旦那さんが奥様の目の前で心肺停止となり、ご本人自ら三途の川を見てきたと語ってくださいました。移植手術を経て週に一度のリハビリをされているそうで、奥様は「目の前で目が動いていることがもう奇跡、存在しているだけありがたい」と語ってくださいり、署名捺印いただきました。

上田さんは地域の連携も深く、引きこもり世帯や空き家がたくさんあり解決した娘のことでの、Workaway の導入がその娘口になるという見解で一致しています。マウイでの活動実績の紹介を経て、Workaway の導入利活用を支援させていただいています。上田さんへの支援は三重での初めての導入実績となり、上田さんも前向きに喜んでくださっています。SDGs パートナーは行政により登録業者が公開されているため、上田さんへの支援をかわきりに全国各地での導入利活用支援を手掛けていきます。

上田さんからは移民の納骨（のうこつ）の相談は宗教宗派の大元からかけあうのがよいのではないかと提案いただき、高野山（こうやさん）の真言宗総本山（しんごんしゅうそうほんざん）のご住職を直接ご紹介いただけるとのことで調整が進んでいます。

山口県の日本ハワイ移民資料館の館長からは協力合意書に署名捺印をいただいており、私的な活動から公の活動に発展しています。日本ハワイ移民資料館とは Martin ケースをきっかけに、様々な日系移民の方のご要望に応じて全国各地で調査代行する心づもりであることを伝えてあり、「ちょうど求めていたので助かる」とお声がけいただいています。

広島の仁保島（にほしま）ハワイ移民資料館からは、学術目的で卒業証書、労働契約書、集合写真などを現地の日系移民から収集してきて欲しいと具体的に要望いただいています。仁保島（にほしま）資料館は JICA や国立国会図書館に蔵書（ぞうしょ）されていましたり、義務教育の教科書に写真付きで紹介されていましたりする資料館で、個人で運営しながらも国家への貢献度が高い資料館として知られています。仁保島（にほしま）の館長からは「今ならまだ間に合う」という言葉をいただいており、取り組みの緊急性について見解が一致しています。

日本で唯一のハワイ姉妹都市である渋谷区の担当課とも連携しており、「ぜひマウイの話を聞きたい」とご要望いただいている。JICA 横浜の次長からは、ハワイに関しては途上国ではないので経済支援ではなく学術調査の観点であれば企画を提案ベースで進めていくことができるとお話しをいただいている。

【投資と覚悟】

この活動には、クレジットカードやキャッシングを含む与信枠を全部投入して、私財 2000 万円以上を投資しています。活動費は毎月 200 万円規模です。この取り組みの性質 上外資系コンサルティングファームの雇用契約の範囲外との人事からの返答を受けて雇用契約を解消し、収入がない状況で活動を続けてきました。趣味や思いつきではありません。X での投稿は 31 万インプレッションを超え、社会的な反響も得ています。

SoulCarrier 共鳴の会として、会員制度も立ち上げています。正会員（年 3 千円）、終身会員（9 万円）、贊助（さんじょ）会員（1 口 1.5 万円）。組織として動き始めています。

【千年事業への共鳴】

時を越える事業への共鳴の体現として、比叡山延暦寺（ひえいざんえんりやくじ）の国宝 根本中堂（こんぽんちゅうどう）大改修に寄付し、伊勢神宮の式年遷宮（しきねんせんぐう）にも奉賛金（ほうさんきん）を納めています。御垣内参拝（みかきうちさんぱい）の参宮章（さんぐうしょう）を個人として授与されています。いずれの寄付もタイムレストランの現住所を記載しています。

今、活動を止めることは公益の損失に値します。取り組みを緩めることも止めることも、選択肢にないことをここで明確にしておきます。

2. タイムレストランで試みること

【なぜこの街を選んだか】

タイムレストラン新浦安。スターツ創業者が「永遠」「ゆりかごから墓場まで」という思想を込めて作った街です。

私がこの場所を選んだのは、その思想が自分のやろうとしていることと重なると思ったからです。存在証明の民主化と、時間を超えて人の存在を包み込む器という発想。共鳴できるはずだと。創業者自身がこの街に住んでいること自体が、理念の表明だと受け取っています。

【自治会で起きたこと】

自治会DXを掲げて、前任者の前自治会長からの推薦のもとで自治会長になりました。2年目になります。前自治会長には推薦いただいたこと、引き継ぎに尽力いただいたことに感謝しています。

しかし蓋を開けてみると、私が自治会DXの施策として導入したLINE Worksを、前自治会長が無断で政治活動に流用しました。グループ内に選挙応援イベントへの参加を呼びかける投稿をしたのです。

年に一度の浦安市への自治会からの意見招集についても、前任会長の指示が入りました。初年度は右も左もわからなかったため従いましたが、名前だけの自治会長と感じて、前任会長の政治利用の懸念を強めるきっかけになりました。

私は自治会規約を確認し、明確な規約違反であることを確認しました。指摘する意向を家族に相談したところ、妻から反対を受けて静観（せいかん）しました。住民も困惑する中、反応できずに困惑した雰囲気になり、以降、自治会DXの推進を含め一切の積極的な活動を自粛（じしゅく）しました。

前自治会長を攻めるつもりも咎（とが）めるつもりも今はありません。市から功労者推薦枠（こうろうしゃいせんわく）があり、私から前自治会長に推薦の条件を満たしているが推薦しますかと意向を確認したところ、真意は不明ですが辞退されました。ただ、何が起きたかを正確に記録しておきたいのです。

妻は私の変容に困惑して、イベント企画などでフォローしてくれました。今年は企画に携わってくださった有志（ゆうし）の方々、妻の働きかけもあり、マンションの理事会への働きかけを通じてハロウィンイベントをはじめて戸建てとマンション一体のイベントにすることができました。私の活動自粛（じしゅく）を妻が支え、住民親睦（しんぼく）は続けることができました。

しかし私から明確に説明することを控えたため、妻から見れば不誠実に映り、家庭不和の原因の一つにつながりました。

また、行政（地域振興課）から、自治会内のイベント日程を連絡し市長を招待することが推奨されていました。初回は招待しましたが、反響の賛否が分かれました。年に一度の新年会なども含めて、市長選の間接応援、地盤確保につながっているという解釈に至り、2年目は招待することを控えました。

これらを踏まえ、定例会をやめ、総会の実施もやめました。現在、行政から補助金の返還を求められつつある状況です。行政が円滑な地域連携を意図していることは理解しています。整理がついたら、自治会活動は再開する予定です。

【石鹼配布の意味】

270個の手作り石鹼を全戸に配る準備をしてきました。「いてくれてありがとう」というメッセージとQRコードを添えて。石鹼と一緒に、この手紙も添えます。この取り組み自分が、自治会DXの答えだと確信しています。前任会長による政治利用を目の当たりにしたからこそ、自治会の本来あるべき姿を行動で示します。この街で、共鳴が生まれることを願って。

「タイムレス」という言葉に込められた思想を、皆さんと一緒に形にしていきたいと考えています。

今週末、石鹼を作ります。家族で見届けてもらえたなら嬉しいです。そして来週、配ります。

3. 現実：3月のデッドライン

ここからは、改めてきちんと伝えておきたいことです。

この住居で活動を継続する判断基準を決めました。以下の条件が3月末までに成立することを目安にしています。

- ・債務の全額解消（決済サービス 1000万円、銀行 300万円、クレジットカード 300万円、その他キャッシング 200万円、親からの援助 600万円、計 2400万円）
- ・ローン返済義務の解消（残債（ざんさい） 約 1.1 億円）
- ・資金・物資両面での継続活動支援の獲得（活動費 月 200万円規模、マーケティング残 500万円）

これが成立しなければ、タイムレストランの物件を3月中に売却し、引っ越しします。この街で「永遠」を一緒に体現できたら、それが一番嬉しい結果です。

売却した場合、概ね 3000 万円程度の売却益が出ることも把握しています。新居の頭金、当面の負債の支払い、援助金の返済に充当します。

270個の石鹼配布は、その判断材料を集めるための最終アクションです。この街から支援が得られるのか、得られないのか。

4. 次の道：佐渡

タイムレストランでの共鳴を願いつつも、次の選択肢も考えています。

タイムレストランを離れる場合、次の拠点は佐渡島を考えています。マウイ島に地形が似ていて、以前から注目していました。

佐渡には、世界遺産に登録された金山があります。そこで働いた鉱夫（こうふ）たちの中には、名前が記録されずに亡くなった人も多くいます。流刑地（るけいち）としての歴史もあり、忘れられた存在が眠る場所です。

SoulCarrier の活動にとって、これ以上ない拠点になります。古民家を探して転居先を決めます。マウイ島を含む海外で年の半分を過ごす暮らしが、継続する前提です。

「佐藤が渡る」。この言葉遊びが、私の次の章を開くことになるかもしれません。

5. 私の両親へ

私の両親へ。これまでの 600 万円の支援に、心から感謝しています。その援助がなければ、ここまで来れませんでした。育ててもらったことへの感謝も、変わりません。

だからこそ、これからは自分の力でやっていきます。

同時に、はっきり伝えなければならないことがあります。

去年、マウイ島に行く前に伝えました。助言も支援も不要です、見守るだけにしてくださいと。

それでも、私の所有する物件の売却査定を、所有者である私に無断で出すという事態が起きました。境界線を越えています。購入候補者が周辺をうろつく事態になっていることも把握しています。

そのうろつく様子に、妻は不安で安心して暮らせない事態となっています。近所の目も気になり、娘にも影響しています。

600万円が贈与（ぞうよ）なのか援助なのか借入なのかはわかりませんが、頼んだことも書面を交わしたこと也没有。債務超過（さいむちょうか）は遅延損害金（ちえんそんがいきん）が発生しますが違法ではありません。しかし、所有者でない物件の売却査定を勝手に実行して家庭生活を不安定にさせることは、法的にも問題がある行為です。助けたい気持ちは理解できます。しかし前言通り、一連の行為は越境（えっきょう）です。

過去を咎（とが）めるつもりはありません。ただ、このような介入はこれで最後にしてください。

今後、経済的な支援は求めません。3月までに、自分の判断で、自分のタイミングで決着をつけます。売却という結果になる可能性も十分にあります。しかしそれは、私が決めることです。

600万円を含む、過去累積して私たち家族へ投じてきた金額は、計画を立て全額お返します。IT企業、外資系コンサルティングファームでの技術キャリアがあり、退職の際にパートナーから業務委託で案件支援を相談いただいており、製薬会社を含む複数の案件を個人で支援予定です。老後の生活不安の中で支援してきた気持ちには、感謝しています。形で返すので、安心してください。

佐渡という選択肢には、物理的な距離を保つ意味もあります。娘が名前を間違えられて尊厳を傷つけられることを防ぐためです。私のようなトラウマは、私の代で断（た）ち切れります。

6. 妻へ

3月という期限のこと、佐渡という選択肢のこと、きちんと話せていませんでした。申し訳なく思っています。

購入候補者がうろつくことで、不安な思いをさせていることもあります。一人で考え込んでしまっていました。

今週末の石鹼作り、できる範囲で見守ってほしい。手を動かさなくてもいい。娘も一緒に、三世代で顔を出してくれるだけで十分です。

この配布の結果は、娘にとっても人生単位で影響します。この街で共鳴が生まれたら、娘にとっても存在を祝福される環境で育つことになります。

インターナショナルスクールには通わせたいし、習い事も続けたい。でも、この取り組みの結果によっては、地に足をつけるべき場所なのかがわかります。そこから見極めたいと思っています。

佐渡に移るとしても、古民家での暮らし、マウイとの二拠点生活、新しい環境での娘の成長。奪われるのではなく、新しい可能性が開けると思っています。

この街に残るにしても、佐渡へ渡るにしても、家族で一緒に見届けたいと思っています。

7. 家族に求めること

お金ではありません。

理解と、協力と、見守りです。

妻と娘へ。今週末の石鹼作り、できる範囲で見守ってほしい。顔を出しててくれるだけでいい。

私の両親へ。これ以上の介入をやめてほしい。見守ってほしい。

私がやろうとしていることが何なのか。なぜそれをやるのか。どこへ向かおうとしているのか。

この手紙で、少しでも伝わったなら幸いです。

どちらに転んでも、道はあります。その道を、家族と一緒に歩きたいと思っています。

どちらに転んでも、私たちは大丈夫です。

* * *

この手紙を読みました。

この手紙は、クオーツガラスに刻印し、1000年保存します。

卓也（本人） _____

妻 _____

娘 _____

父 _____

母 _____

佐藤卓也

2026年1月24日追記：600万円が今は700万円を超えていたと母が指摘し、父が内容が正しくないのでサインはしないと回答した。父母からの署名は得られなかった。なお、この署名は内容の正誤を問うものではなく、読んだことを確認するものであった。

この結果を受けて、存在証明の民主化が必要であり、「いてくれてありがとう」という存在の祝福表明の大切さを強めるに至った。

話にならないので、共鳴が得られるまで父母との会話は形式問わず自粛することとする。

【振り返って思い出したこと】

小学校の宿題で、自分の名前の由来を親に聞いて授業で発表する機会があった。両親に聞いたところ、「覚えていない」と。兄の名前の由来は覚えているが、卓也の名前の由来は説明できないと回答された。授業で「知らないと言わされました」と発表した。絶望だった。

本当のトラウマは、振り返った時に心の傷が深すぎてすぐには思い出せず、ふとフラッシュバックして鮮明に映像が頭に浮かぶ。

【2026年1月24日の経緯補足と考察】

妻は自らの立場を脇に置き、言いづらい葛藤を抱えながら、両親に「息子に謝ったことはありますか?」と尋ねたところ、「ない」との回答。「謝ったらどうですか? 金額の差異ではなく、息子さんは傷ついているということを伝えているんですよ」と伝えたところ、父は「謝る必要はないし、謝るつもりもない」と回答しました。

また父は、海外にいる時に支払いが滞ると電気が止まり住めなくなるから支払ってあげてきたんだと発言しました。その本人が売却査定を勝手にするのは自己矛盾ではないかと疑問が残りました。投資家とでも思っていたのだろうかと勘織ってしまいます。

私にとっては、私の教育コストを自肃し孫の教育機会に当てた、合計金額から換算して兄に割り当てた教育費用より安いだろうから世代を超えた教育費用と捉えることもできるのではないかという思いもあります。娘は国際的な現地での交流を深め、帰国後は日本と米国の違いについて語るようになりました。国際的な場面でギフトエコノミーの実践体験は、生涯単位でかけがえのない教訓につながっているはずです。

老後の生活資金への不安があるのだと思います。その気持ちは理解したいと思っています。母は個別に「ごめんね」と私に伝えてきましたが、何に対する謝罪なのかがわかりません。そもそも謝罪してほしいとは書いていません。母は妻から「謝罪した方が良い」という言葉を受けての行為だったのでしょうが、中身と気持ちを結局見ていない、見えていないのだという思いを強める出来事となりました。

【2026年1月26日追記】

手紙に書いてあった政治利用について夫婦で会話しました。妻から「総会をやらないのは別の話では?」という発言がありました。怠惰の疑いと推測したため、理由を伝えました。「総会資料として、自治会長として前任自治会長の指示に基づき特定政党の政治利用を間接的に支援する結果となりました」と書かざるを得ない。たとえそうではないとしても、家庭での揉め事を避けるため妻の意向を重視して前自治会長の行為を黙認したことになる。自治会長としてこれは不本意であり残念である、と。

妻は「住民で法律に詳しい人に聞いたら違法ではないと言っていた」と発言し、加えて「被害妄想が強いね」と発言しました。その後、私の事業運営で調達した資材の過不足に對して指摘し、「頭おかしいんじゃない、病気なんじゃないかと思ってる」と妻は発言しました。

この一連の発言に対して、私は「責任を果たす、誠実さを示す姿勢に対して認知を歪めて妨害する行為に映っている」と伝えました。妻は「そんな認識はないしもっと普通に会話したい」「今でも荒げないで欲しいなと思う」と回答。私は「それだと不正の温床になる。親切にしたから悪いことやってるの見逃してって話だよ。積み重なったら取り返しつかない」と伝えました。「被害妄想という言葉をもって普通の会話というのであればそれは出来ない」と伝えました。

その後少し時間をおいて、妻に「ガスライティングという言葉を知ってる?」と聞いたところ、「あ、うん」と妻は回答しました。その後娘が寝た後に妻は私の部屋に入ってきて、倉庫の購入履歴を確認して欲しいということだったと伝えてきました。私は石鹼を作りたいので、作業に集中させて欲しいと伝えて、妻は戻っていました。しばらくして妻は再び入ってきて、ガスライティングを知ったのは一年前で、夫にやられたからたくさん調べて詳しくなったと言いました。並木義和がガスライティングを詳しく動画にしていて、たくさん見ていましたとも言いました。「動画では外のことばかり言ってて、内面が作り出してるんだ、だから内面を変えることが大事なんだと学んだ」とも言いました。戻っていく前に石鹼を見せて、これを配るつもりだと伝えました。妻はQRを読み取って中身を確認し、「一枚でいいでしょ、手紙は出さないで欲しい、やめて欲しい」「娘を巻き込まないで」と懇願してきました。私は「多面的に判断して決める」と伝えました。その後、自己正当化、自己満足など様々な言葉を並べ、「よく言ってこれたね」「普通言えないよ」「一年前あなたはどんな時にガスライティングしたと思う? これ宿題ね」と言い、最後に「お互い様だよね」と言って戻っていました。また、妻は「長いからお父さんも大して中身見てなかったんじゃないの」とも発言しました。自己の主張の強化に他人を巻き込むことが無意識的に本能的に繰り返されていたのだと思います。

【2026年1月27日追記】

手紙を公開した翌日。まず、娘が私のことを妻の目の前で囁んだり叩いたりしてきました。私は「暴力されたから今日は一緒に出かけられない」と娘に伝えました。「なぜ暴力を始めたのか」と娘に聞いたところ、「ママがやってたから」と答えました。それを妻に伝えたところ、妻は「私はやってない」と回答。「キャンプ場で見たと言っていた」と伝えたところ、妻は「あー、話が通じなかつたからだよ。あ、いまその状態なのか」と発言しました。暴力を「話が通じなかつたから」と正当化し、私を「話が通じない人」扱いしています。オロワルキャンプでの暴力を娘が学習し、再現しています。妻はそれを肯定しました。その後、娘と一緒に石鹼作りをしている様子を横目に、妻が「玄関片付けたいから手伝って」と言いました（普段しないことをし始めている）。私が手伝わなかつたところ、娘が「パパが手伝ってくれない」と発言し、私に手を挙げてきました。娘は妻に「パパは今はやらないって言ってた」と伝え、妻は「ありがとう、私の代弁をしてくれて」と発言しました。娘を介して圧力をかけ、娘が「代弁」する役割にされています。子供の武器化が継続しています。目的を達成した（娘を使って私に圧力をかけた）ことを受けて、妻は「まあいいか、ゆっくりやろう」と発言して別のことをし始めました。玄関の片付けは「お友達を呼ぶために」という名目でした。しかし目的を達成したら「まあいいか」。お友達を呼ぶ話はどこへ行ったのでしょうか。娘のためという理由で、娘を道具にした。自

己矛盾です。娘は道具として使われました。娘が学んでいることが心配です。人を動かすには暴力を使う。「代弁」すると褒められる。道具として使われる事が普通。目的のために人を使っていい。これが「普通」として刷り込まれています。私が断ち切ろうとしているカルマが、隣で娘に継承されています。娘はやらざるを得ない状況に置かれています。ママが求めている、パパが動かない、自分が何かしないと。「代弁」したら褒められた。5歳の子供に選択肢はありません。娘は被害者です。加害者にさせられている被害者です。自分の思い通りにならない状況下で、これらの行動が発動しています。昨日は「手紙を出さないでほしい」が通らず、ガスライティングと攻撃が発動しました。今日は「手伝ってほしい」が通らず、娘を使った圧力が発動しました。要求が通らないと、手段を選ばない。このパターンが繰り返されています。同日、妻から「お墓って何箇所くらい行った?」と聞かれ、「5000箇所くらい」と答えたところ、「あ、だからか」と言われました。続けて「お墓は魔だから、どっかでさ、いいや言わないでおこう」と発言しました。存在証明の民主化という活動を「魔」と結びつけ、否定しようとしています。娘を守るために、この記録を残します。

この記録を残すのは、二つの理由からです。一つは、自分の認識を自分で守る基盤を作るため。もう一つは、「やっていい相手だ」という無自覚なバイアスに気づくきっかけを残すためです。

【ガスライティングについての補足】

ガスライティングとは、相手の現実認識を揺さぶり、自分の判断を信じられなくさせる行為です。意図的な場合も、無意識に行われる場合もあります。

以下のような状況で起きやすいとされています。

- ・親密な関係（夫婦、親子、恋人）
- ・力関係の差がある関係
- ・相手が「反論しない」「受け入れる」タイプだと認識されている場合

「被害妄想だ」「考えすぎ」「そんなつもりはない」といった言葉が繰り返されると、被害を受けた側は自分の感覚を疑い始めます。

この行為の難しさは、第三者から見ると「どちらが加害者かわからない」点にあります。被害を訴える側が「被害妄想」「考えすぎ」とラベルを貼られ、逆に加害者扱いされることもあります。

だからこそ、記録を残すことに意味があります。

【危険な言葉のパターン】

以下のような言葉が繰り返される場合、ガスライティングの可能性があります。

- ・「被害妄想だね」「考えすぎ」
- ・「頭おかしいんじゃないか」「病気じゃないか」
- ・「そんなつもりはない」
- ・「お互い様だよね」
- ・「普通言えないよ」「よく言ってこれたね」
- ・「内面を変えることが大事」（相手の内面が問題だという主張）

【対処法】

- ・名前をつける（「これはガスライティングだ」と言語化する）
- ・記録する（事実を残す、日付と発言を記録する）
- ・距離を置く（物理的・精神的に）
- ・一人で抱えない（信頼できる人に話す）

【する側への問いかけ】

- ・自分がやっていないか
- ・知っていて使っていないか
- ・「悪いと思っていない」状態になっていないか
- ・相手の現実認識を揺さぶっていないか

【回復のステップ】

1. 物理的距離を持ち、冷静になる
一旦離れて、自分の輪郭を確認する。
2. 共通言語と相互認識の土台を作る
「ガスライティング」という名前をつけ、「これは何か」を共有し、対話の土台を作る。
3. 精神的距離を持つ
境界を明確にし、「もう効かない」を伝え、記録する。
4. 続く場合：物理的・精神的距離を確保し、健全な自己を回復する
変わらないなら、離れる。自分を守ることを優先し、健全な環境で回復する。

存在を祝福しようとする人は、認知を揺さぶる行為に直面することができます。この記録が、する側にもされる側にも、気づきと突破口になることを願っています。

【本手紙の共有について】

この手紙は、タイムレストラン全270戸に配布する石鹼のQRから読めるようにします。

私が存在した証として。

娘に「いてくれてありがとう」を届けるため。

この街が「存在を祝福する場所」であると示すため。

父へ、母へ。

この街に来るということは、実の子孫の名前を間違え続け、子孫の名前の正誤を軽んじながら、自らの正誤にこだわった祖父母として、270戸への配布を通じて、全年代1000人規模の視線の中を歩くということです。

私たち家族はこの出来事を公開情報として生涯抱えて、日本国内、マウイ、世界各国で使命を全うしていきます。それでも孫に会いに来るかは、お任せします。署名はいつでも受け付けています。

共鳴が生まれる日を、待っています。

【なぜ父も母も妻も、それぞれの正義を手放せなかったのか】

父の世代（1940-50年代生まれ）は、戦後復興と高度経済成長の中で育ちました。「頑張れば報われる」「弱音を吐くな」「男は黙って働け」という価値観が支配的だった時代。存在を祝福するという発想自体が、その世代には馴染みがなかったのかもしれません。彼らが受け取らなかつたものを、子どもに渡すことはできなかつたのではないか。父は「謝る必要はない」と言いました。それは、謝ることが「負け」を意味する価値観の中で生きてきたからかもしれません。1945年、日本は「間違った国」になりました。だから戦後80年、「正しくなければ」と必死になった。「間違い」への恐怖が、存在より正誤を優先する価値観を生みました。息子の名前を間違えても謝れないのは、謝ったら自分が「間違い」になるから。敗戦国のトラウマが、家庭にまで染み込んでいたのだと思います。

母も同じ時代を生きてきました。「三歩下がって夫を立てる」「家庭を守るのが女の役割」という価値観の中で、夫の判断に従うことが正しい選択だった時代。夫が「謝らない」と言えば、それに従うしかなかったのかもしれません。

妻は両親に「息子に謝ったことはありますか？」と問いました。これは勇気ある行為でした。しかし、同じ妻が、私に対しては謝りませんでした。認めませんでした。「お互い様だよね」と言って戻っていました。他人に求めたことを、自分はしない。これは自己矛盾です。しかし、その矛盾に気づいているかどうかは、本人にしかわかりません。

両親から私へ、正誤を優先する価値観が流れてきました。私はそれを断ち切ろうとしました。しかし、最も近い場所に、同じカルマがありました。認めない。謝らない。正誤にこだわる。存在より正しさを優先する。カルマは、気づかない限り、最も近い関係の中で繰り返されます。

これは個人の問題ではなく、世代のカルマなのだと思います。だからこそ、私の世代で断ち切りたいと思っています。2026年、この記録をもって、正誤の時代から存在の時代へ。存在元年とします。

【なぜガスライティングをするのか、そして存在の祝福が必要な理由】

ガスライティングをする人は、かつて存在価値を揺さぶられた経験を持っているのかもしれません。傷を癒す代わりに、武器にした。相手の現実認識を揺さぶることで、自分の存在を確認しようとする。「お前がおかしい」と言うことで、「自分は正しい」を保とうとする。これは生存戦略かもしれません。しかし、それは傷の連鎖を生みます。

ガスライティングは「存在の否定」です。「お前の認識は間違っている」「被害妄想だ」「頭がおかしい」。すべて、相手の存在の根拠を揺さぶる言葉です。だからこそ、「存在の祝福」が対極にあります。「いてくれてありがとう」は、相手の存在を無条件に認める言葉です。ガスライティングが存在するからこそ、存在の祝福の必要性が証明されます。闇が深いほど、光の意味がわかります。

【カルマを断ち切る方法】

「いてくれてありがとう」を、まず自分に言うこと。自分の存在を自分で祝福できれば、他人の存在を揺さぶる必要がなくなります。他人を否定することで自分を保つ必要がなくなります。気づくかどうかは、本人の選択です。この記録は、気づきのきっかけとして残します。千年後、誰かの役に立つかかもしれません。

この物語に登場したすべての人に、悪気はなく、それぞれの正義があったのだろうと思います。前自治会長も、スターツ創業者も、父も母も妻も。それぞれの物語が、それぞれの視点で続していくことを、私は祝福します。

もし、何か響くものがあり、伝えたいことがあれば、いつでもご連絡ください。

こんなご連絡を歓迎します

【共感・交流】

- ・「私も似た経験があります」という共感
- ・「一緒に食事でもしませんか」という交流
- ・ただ「読みました」という一言

【活動への参加】

- ・「マーティンケースを手伝いたい」という協力
- ・「研究開発に関わりたい」という参画
- ・「石鹼作りを見てみたい」という興味

【ご依頼・ご相談】

- ・「うちの家族の話を聞いてほしい」という相談
- ・「いてくれてありがとう、伝えたい相手がいる」という依頼
- ・「自分の存在を記録してほしい」という希望

【ビジネス・支援】

- ・「寄付で応援したい」という支援
- ・「投資・出資を検討したい」という資金支援

- ・「コンサルティングを依頼したい」という仕事
- ・「講演をお願いしたい」という登壇依頼

【専門知識の提供】

- ・「法務・税務の観点からアドバイスできる」という専門知識
- ・「経営・事業戦略について話したい」という知見共有
- ・「医療・健康面でサポートできる」という支援
- ・「海外展開について相談に乗れる」という協力
- ・「人脈やネットワークを紹介できる」という橋渡し

私たち家族は、すべてを祝福します。「いてくれてありがとう」を届け続ける家族として。

【連絡先】

電話：080-4448-7444

メール：business@satotakuya.jp

活動詳細：bit.ly/boundaristjp

ご寄付：wise.com/pay/me/satot67

本資料の第三者への共有は自由です。記載内容は筆者個人の認識と見解に基づくものです。本資料は予告なく更新される場合があります。本資料の利用により生じた損害について、筆者は一切の責任を負いません。

SoulCarrier 共鳴の会
Founder & Boundarist
佐藤卓也